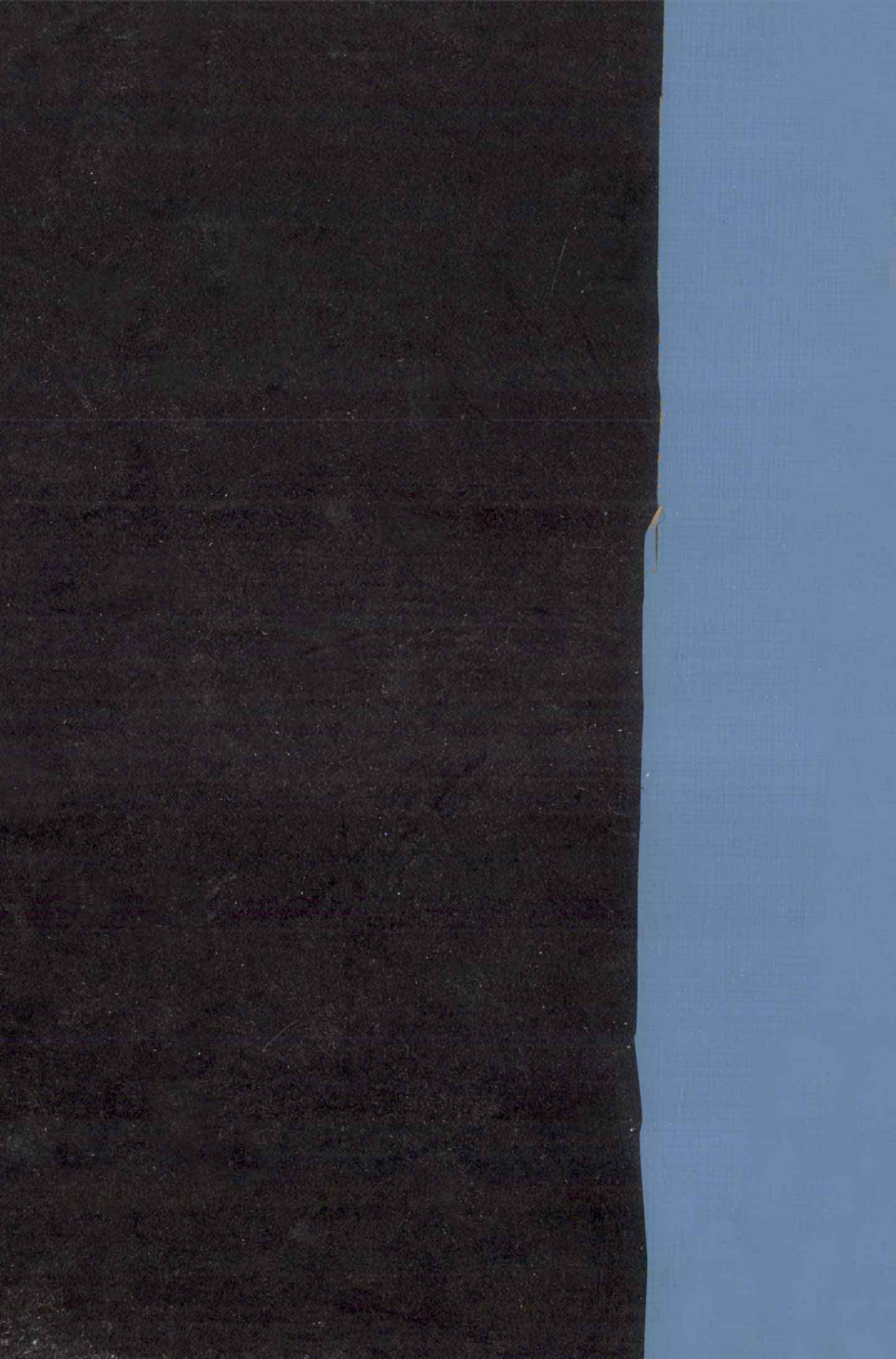




決闘者

宮本武蔵
少年篇 青年篇

柴田鍊三郎

講談社





決闘者 宮本武蔵 少年篇・青年篇

昭和四十八年七月二十四日 第一刷発行

著 者 柴田鍊三郎

発行者 野間省一

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽二一二一二

郵便番号 一一二

電話 東京(945)一一一一(大代表)

振替 東京三九三〇

印刷所 慶昌堂印刷株式会社

製本所 藤沢製本株式会社

定 価 七二〇円

落丁本、乱丁本はお取り替えます。

© 柴田鍊三郎 昭和四十八年

Printed in Japan

0093-30175-2253 (0)

(文2)

目次

少年篇

夫婦非命

姥棄小屋

精気

毒酒

沢庵

夢遊劍

修業虫

岩

姉と弟

高札

初試合

人買い

慶長五年夏

伏見城

九 一五 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十

首化粧

海賊

竜神

別離

青年篇

独楽

佐々木小次郎

崖の下

遊女

夫婦というもの

吉岡家の人々

誘拐

飯粒

憎悪心中

残党

殺生関白遺孤

七

一〇

一五

二五

三五

三三

三〇

二四

二〇

一五

一三

一六

一七

一八

一七

湖賊	女の宿	泣き虜	醜女化粧	柳生宗矩	伊賀谷	家来願い	宝蔵院衆	多敵の位	小金ヶ原	待伏せ	不義回想	伝心月叟庵	小鳥	賈正宗	同居	姫君
----	-----	-----	------	------	-----	------	------	------	------	-----	------	-------	----	-----	----	----

二五	二六	二六	二七	二八	二九	三〇	三一	三二	三三	三四	三五	三六	三七	三八	三九	四〇
----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----

哭く
豊国廟
名目人
忍者討ち
かたわ小屋
仏像
一乗寺下り松
富田勢源
婦女小太刀
鳥部野試合
隠遁者
小石助勢
夜明け前
阿修羅
死の闇
生死の客
会者定離

三〇〇
三〇六
三二
三九
三五
三二
三七
三三
三五〇
三六
三六
三六
三六〇
三七
三六
三六
三六

決 闘 者

宮本武蔵 少年篇・青年篇

装 装
幀 画

村 宫

山 田

豊 雅

夫 之

少年篇

夫婦非命

一

「うっ！」

ひどい呻き^{うめ}をあげて、足を停めた男が、両手で、右脚の膝がしらを、押えた。

台地の斜面をうねる道であったが、べつに勾配が険しかったわけではない。路面は、白く、平坦で、石ころなどなかった。

ゆっくりと足をはこんでいて、何かにつまずいたのでもないのに、急に、その膝がしらに、激しい疼痛をおぼえたのである。

四五歩うしろを、三歳ばかりの幼童を背負うて、ついて来ていたその妻が、おどろいて、寄って来た。

「また、出ましたか？」

「うむ。もう、出ぬと思って居ったが、忘れた頃に、出おった」

良人が、うずくまると、妻は、幼童を背中からおろしておいて、その膝がしらを、もみはじめた。

美作国吉野郡宮本村の地下牢人新免武仁と、その妻佐久、そして、その子弁之助は、山ふたつ越えた播州佐用村にある佐久の実家へ行って、その帰途であった。

新免武仁は、頬にほつれ毛をまつわらせ乍ら、必死に、膝がしらをもむ妻を、眺めやって、

——苦勞をかける。
沁々^{しみ}と思った。

新免武仁は、この一円——五千石を領する新免伊賀守の血族で、宮本村の長であった。

しかし、宮本村の支配者ではなかった。宮本村の近くにそびえる竹山という山岳に城を構えた平田将監が、新免伊賀守の代理として、首領の座に在った。

新免武仁は、その平田将監と、些細な事から仲たがいで、宮本村に居ついたまま牢人^{らうにん}していた。

当然、田畑をたがやさなければ、くらしのたたぬ身となったが、新免武仁は、その農耕を、妻にまかせたきりで、兵法修業のみにうち込んで来た。

いずれは、しかるべき武將に随身して、戦場で、めざま

しい働きをしてくれようという野心を藏したのである。

新免武仁は、刀槍の術に、天稟をそなえていたのである。

その修業が一時中断されたのは、三年前、突然、右脚の膝がしらに、もの凄^{こわ}い疼痛が起つたためであった。武仁は一月あまり、寝たきりであった。

ようやく、癒えたものの、武仁は、もう、それまでのように、二十日も一月も、山中にこもつて、けものを追ひ、立木を搏つ荒修業をつづけることはしなかった。

いわば、この三年間は、妻を野働きさせて、ぶらぶら遊んでいる無能な地下牢人ぐらしであった。

山ふたつ越えて来ただけの短い旅で、突如として、膝の患部が再発したことは、その疼痛に堪えることよりも、将来に対する絶望感で、新免武仁を、呻かせた。

——おれは、この妻にたよつて生きるだけの廢人になりはてたか。

自身に、呟いた。

その時——。

ゆっくりと、大股で、そこへ近づいて来た者があつた。十歩あまりのむこうに、立ちどまつたなり動かぬので、新免武仁は、何気なく、視線を挙げた。

とたん、

「おっ——」

思わず、膝がしらの疼痛を忘れるおどろきの声を發した。

新免武仁と同じ地下牢人の、播州石海村に住む平田無二斎が、そこに傲然と仁王立つたのである。

新免武仁と平田無二斎は、宿敵であつた。

七年前、新免伊賀守の面前で、真剣の試合をしている無二斎の頬から上唇へかけて、凄じい刀痕が走っているが、それが、その試合の結果であつた。

武仁の方は、左腕上膊の肉をひと殺ぎされていた。

二

「新免——、なんのさまだ、それは？」

平田無二斎は、擲^な擲^なのひびきをこめた声音で、問うた。

あたりに人影のない台地の野道ではあるが、武士たる身が、白昼、蹲^{くま}つて、妻に膝をもませている光景は、慙^はじねばならぬ振舞いに相違なかつた。

痛風が起つて、歩けなくなつた、という弁解をすることは、いかにも、未練たらしい。

まして、對手が、宿敵の平田無二斎である。

新免武仁としては、絶対に見せてはならぬ男に、この惨めな光景を、目撃させてしまったわけであつた。

武仁は、妻を押しつけて、立った。

「この道を歩いて来たことは、身共を訪ねて、宮本村へ往つたことか、平田無二斎？」

武仁は、訊ねた。

「左様——」

無二斎は、にやりとして、こたえた。

七年前、無二斎は、武仁に向つて、

「お主に勝つ一手が成つたならば、必ず、宮本村を訪うぞ」
血まみれの顔面から、狂気じみた眼光を放つて、云つたことであつた。

今日、その一手を編んで、宮本村を訪うたところ、武仁が留守であつたので、ひきかえして来た——その帰途、無二斎は、武仁の武士にあるまじき惨めな姿を、目撃したのである。

「勝負、受けよう！」

新免武仁は、云つた。

佐久が、小さな悲鳴をあげた。悲鳴をあげたが、兵法者の妻として、良人の病氣を理由に、試合を拒絶すること、口にできなかった。

「おれの成つた一手を、受けるか、新免？」

無二斎は、うそぶくように云つた。

「受けよう！」

武仁は、差料を、さきに抜いた。そして、

「佐久、はなれろ！」

と、命じた。

佐久は、幼童を抱きかかえると、喘ぎ乍ら、なだらかな斜面を、降りた。

無二斎は、桜の杖に仕込んだ無反り三尺の長剣をゆつくりと抜いて、鞘にしたのを、抛りすてた。

武仁は、青眼に構え、無二斎は、こぶしを額に当てる上段にとつた。

野道は、無二斎の立つ地点の方に、やや上つていた。

距離は、十歩あまり。

対峙して、しばらく、両者は、微動もしなかつた。

武仁も無二斎もまばたかず、斜面の下方に退いた佐久も、そしてその双腕に抱きしめられた幼童もまた、まばたかなかつた。

突如、無二斎が、地をすべるように進んだ。

進みつつ、上段にふりかぶつた三尺の白刃を、直立から徐々に横へ傾けた。

それに対して、武仁は、疼く右膝を曲げて、右肩を落し、青眼の剣を、やや高めに変えた。

無二斎は、三步の距離に迫つて、いったん、足を停めた。

次の瞬間――。

凄じい懸声もろとも、地を蹴った。

武仁は、当然、横へ一線を引いた敵の長剣が、こちらの頸を薙いで来るものと思い、疼く右膝を折って、身を沈めざま、突きを放った。

意外の業が、無二斎には、工夫されていた。

跳ぶとみせて、わずかに両足を地上から浮かせただけで、両脚を直線になるばかりにぱっと拡げ、その股間の宙を、武仁に突かせておいて、掩いかぶさるかたちになって、その長剣を――掴んだ手もとから二寸ばかりのところを、武仁の頸根へ、ざくっと割りつけた。

剣の鬨は、常に、切先二寸あまりで敵を斬る。その部分に心気と力が最もこめられるし、間合をはかつての一撃であれば、当然、そうなる理であった。

刃の中央部を使うのは、脇を駆け抜けざまに、胴を薙ぐ一手だけである。刃の根もとを使う業は、兵法にはなかった。

無二斎は、敢えて、長剣の根もとを使う業を工夫したのである。

勝負は、一方の白刃が、敵の五体のどこかへ一閃した刹那によって終るのが当然であるが、この場合は、ちがっていた。

無二斎は、武仁の頸根へ割りつけた長剣を、鋸で木材を挽き切るように、渾身の力をこめて、ぎりぎりとなつた。あまりのむごたらしい光景に、佐久は、視界が暗紫色に烟って、その場へ、倒れた。

三

佐久が、意識をとりもどしたのは、おのが下肢が、ひえびえとした空気にあてられていることによってであった。着物の裾が捲られ、下着も剝がれ、下肢はあらわになっているばかりか、大きく押しひろげられているのであった。

佐久は、視野いっぱいにかぶさって来ている無二斎の髭面に、あつとなつて、はね起きようとした。

「観念することだぞ、新免の妻女！ これは、敗者の妻たる身の宿運と、あきらめることだ」

無二斎は、冷然として、うそぶいた。

双手も両膝も、動けぬように押えつけられていて、佐久には、わずかに、首を振ることと、叫ぶ自由があるばかりであった。

「殺せっ！」

佐久は、絶叫した。

「殺すかわりに、おれの妻にする」

「ああっ！」

佐久は、ぬめぬめとした重い厚いものが、秘部に押しつけられる悪寒で、総身を粟立たせ、顫わせた。

おのが村を、すぐ目の前にした台地の野のまん中で、良人を惨殺され、さらに、自分が犯されるという生地獄に遭うた佐久は、いっそ、気が狂いたいと願った。

わが子がいなければ、佐久は、ためらわず、舌を噛み切つたに相違ない。

佐久は、太いものが一杯に、体内に押し入って来るや、三歳のわが子に、救いをもとめるように、視線を宙にさまよわせた。

わが子の姿は、視線に入って来なかった。

「弁之助っ！」

佐久は、絶叫した。

佐久の視界からはずれた場所に、立ちすくんでいた幼童は、母の絶叫で、急に、われにかえたように、走った。

走り寄ったのは、血まみれになって、地面に俯伏している父親のそばであった。

弁之助は、その手から、白刃を、把った。

三歳の幼童には、それはあまりに重すぎた。

弁之助は、それをすてると、父親の腰から、脇差の方を抜き持った。

両手にひしとにぎりしめるや、無二斎の背中ををにらんで、近づいて行つた。

「弁之助！」

佐久は、なお、わが子の姿をもとめて、呼びつづけていた。

もはや下半身は、完全に無二斎の暴力にゆだねられてしまっていた。

弁之助は、母親の視角が、掩いかぶさった無二斎によつてさえぎられ、めくらとなった一線を、まっすぐに進んで来た。

無二斎は、夢中になって、佐久の股間を押しあげ、突きあげる。

ついに――。

弁之助は、無二斎の背後に来た。

三尺の小さな軀に、憎しみと怒りをみなぎらせて、切先をその背中めがけて、

「やあっ！」

と、突き刺そうとした。

不運であつたのは、その瞬間に、佐久が片脚の自由をとりもどして、激しくもがいたことであつた。

弁之助は、その片脚に打たれて、よろけた。

無二斎が、ぱっと上半身をよじった――その空間を、弁

之助の突き出した白刃が、走った。

切先は、無慚にも、母親佐久ののどを、まっすぐに、刺した。

よろけ込んだ弁之助の体重が、白刃にかかったため、切先は、したたかに、のど奥まで貫いてしまった。

噴きあがる血飛沫をあびて、弁之助は、氣を喪った。

どさっ、と板敷きへ抛り出されて、弁之助は、目をひらいた。

おそろしく穢い、暗い屋内であった。

弁之助は、倒れたまま、丸い大きな睨子をいっばいに張って、この家へ、自分をばこんで来た男を、仰いだ。

父親を殺し、母親を犯した男は、厩戸裏端へ、どっかと胡座をかき、粗朶をくべて、炎をあげさせると、自在からつるした釜の蓋をとって、中をかきまわしはじめた。

弁之助は動くことができなかった。

ただ、このおそろしい男を、まばたきもせずに、瞋めてゐることだけで、せい一杯であった。

無二斎は、幼童の視線など無視して、釜の中をゆっくりとかきまわすことに余念がない様子をみせていたが、やがて、木椀に、芋粥をすくい入れると、はじめて、弁之助へ、目をくれた。

「おい、起きて、ここへ来て、食え」

「……………」

「腹が空いているだろう。食え」

「……………」

無二斎は、弁之助が動かぬとみると、さっさと、芋粥をすすりはじめた。

たちまち、五六杯平げると、無二斎は、

「わっぱ、強情を張らずに、食え」

と、うながした。

弁之助は、その時はもう起き上っていたが、その場を動かうとしなかった。

「わっぱ——。この平田無二斎は、お前の父親とは、尋常の果し合いをしたのだ。運がよく、こっちが勝っただけのことだ。よいか、おれが、お前の父親を、斬ったのは、芸者の業がまさったからだ。よくおぼえておけ。……お前は、しかし、父親が斬られるところを、目撃した。わしが、憎かろう。敵を討ちたい、と思って居ろう。乳ばなれしたばかりの、その幼稚では、わしは、討てぬ。大きくなるまで、待たねばならぬ。……この家で、わしが、養ってやる。剣の術も、教えてやる。……わしが敵であることを片刻も忘れずに、一心不乱に修業して、強うなれ。強うなったら、いつ、わしを襲ってもかまわん。隙をうかがっ